

# 「死首の咲顔」の五曾次

大阪芸術大学 文芸学科 教授 出口 逸平

上田秋成は「源太騒動」と呼ばれる殺人事件（1767年）を元に、『ますらを物語』（1806年 仮題）と『死首の咲顔』（1808年）の二つの作品を残している。

今回はとくに『死首の咲顔』に登場する五曾次と、歌舞伎『けいせい 倭 莊子』（1784年初演）の近藤軍次兵衛との関係について考えてみたい。

## 1 吝嗇な父

「源太騒動」とは、1767（明和四）年12月3日京都一乗寺村の渡辺源太が、妹やゑと渡辺右内との恋愛のもつれから、右内の父団次の前で妹を斬り殺した一件を指す。裁判の結果、父の渡辺団次は「五十日押込」となるが、その理由として息子右内の「密通」に対する監督責任、事件当日の源太への対応のまずさなどがあげられている。

ところが『死首の咲顔』の五曾次は、裁判記録にはまったく出てこない強欲非道で吝嗇な「おにおにしき心」が強調されている。

父がおにおにしきを鬼曾次と呼び、子は仏蔵殿とたふとびて

鬼曾次あざ笑ひて云ふ。

鬼の口ありたけにはだけて（『死首の咲顔』）

ただしこの悪党の五曾次はそのあまりの吝嗇さゆえに、かえって滑稽な道化的要素を帯びていることもまたたしかである。

人このもと（注・息子の五蔵）に先ずやすらふをこころよしとて、同じ家の中に曾次が所へはよりこぬ事なるを、父はいかりて、無やうのものには茶ものますまじき事、門に入る壁におしおきて、まなこひからせ、征しあらがひけり（『死首の咲顔』）

こうした過度の吝嗇ゆえの道化的要素は、実は『けいせい 倭 莊子』の軍次兵衛にはっきり見ることができる。

軍次 コリヤ、恠め。おりや生まれついて、人に物遣る事はきつい嫌いじや。オオ、出す事は袖口から手も出さぬ。（略）万事に心を附けて取り込む事ばつかりを思うてゐる。

この徹底した儉約ぶりと貪欲さは、『死首の咲顔』の「我が家には福の神の御宿申したれば」と豪語する五

曾次の「無やうのものには茶ものますまじき」態度に重なる。

こうみてくると五曾次が軍次兵衛と同じく、歌舞伎の役柄でいう「半道敵」（道化がかった敵役）にかなり似通った造形であることがわかる。

## 2 「もどり」の拒絶

ただし『死首の咲顔』の五曾次が、『けいせい 倭 莊子』の近藤軍次兵衛と大きく異なる点がある。それが軍次兵衛の「もどり」の場面である。

勘左 イヤ、姿は変つても、心は矢張り強欲非道。  
軍次 オオ、この非道も忤が切腹、命を捨てて身共に意見、六十年仕込みし悪事も、佐国が忠義を立つる最後の一句に、我慢の角も忽ちに、子を先立つる我が心。（略）彼れを思ひこれを見て、今日只今真人間、武士の性に立帰り、古主の御恩思ひ知つたる証拠は、コレ、この首。

ト本舞台へ、本首直す。（『けいせい 倭 莊子』）悪人にみえた人物がじつは善人だった場合、「善心（本心）に戻る」という意味でそれを「もどり」と呼ぶ。実際、改心した軍次兵衛は息子佐国の首を主君の身替りとする一方、「斯う云ふ事と知るならば、疾にも女夫にせうものを」「なぜもつと早う、おりや善心にならなんだぞ」と悔恨の涙を流している。

これに対し『死首の咲顔』では、「もとよりよめ子にあらず。死人ならば、とくつれいね」と兄元助（事件では源太に相当）を面罵し、斬首を袖につつで家を出る息子五蔵には「おのれ、其の首もちていづくにか行く。我がおやおやの墓にをさめん事ゆるさじ」と、頑なまでに二人の婚姻を認めようとはしない。

また裁判の結果、家財没収のうえ追放の身となっても、当人はいたって意気軒昂と「ざい宝なくしたれど、又かせぎたらば、もとの如くならん。難波に出でてあき人とならん」と「つらふくらしつつ立ち出でて、いづくにか行きけん」とある。

こうして「もどり」の有無が、五曾次と軍次兵衛の言動を大きく分けているが、その違いの意味については稿を改めて考えることにしたい。